

考古学への誘い

～高槻市夏休み子ども大学におけるワークショップの実施～



#文化財の活用

目的

児童の考古学や文化財への関心を高めるとともに、ワークショップの企画・運営を通して、文化財の保存と活用に携わる人材を育成する



活動の概要

- 主な連携先
高槻市／関西大学文学部考古学研究室
- 活動地域
大阪府高槻市 クロスパル高槻(高槻市立総合市民交流センター)
- 活動期間
2016年度より隔年で実施継続中(2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて中止、代わりに2021年度に実施)
- 活動資金
高槻市／関西大学

連携にいたる経緯

文学部考古学研究室は、考古学の研究成果を社会に還元すること、これからの社会に通用する学芸員を育成することが社会的責務であると考え、種々の活動を行ってきた。本ワークショップはその一環として、高槻市と本学との地域連携に関する協定に基づき実施した。



活動内容

本イベントでは、児童の考古学に対する関心を高めるための3つのプログラムを実施した。

①紙芝居

はじめに、本研究室の学生が制作した奈良県明日香村に所在する川原寺に関する紙芝居を上演した。紙芝居は、本研究室が過去に発掘調査を実施した川原寺裏山遺跡の調査成果に基づく内容であり、川原寺に関する知識だけでなく、考古学や発掘調査に関しても学ぶことができるものとなっている。

②クイズ

次に、紙芝居の内容を振り返ることを目的とした4択形式のクイズを実施した。本イベントは低学年の部と高学年の部に分けて実施したが、対象学年によって回答の選択肢を変えることで、難易度の調整を行うなどして、積極的な参加を促すよう努めた。

③埴仏(せんぶつ)・瓦づくり体験

上記2つのプログラムを通して得た埴仏や古代瓦の知識をふまえ、それらの製作方法についても学んでもらうため、製作体験を実施した。学生は単なる製作補助だけでなく、参加児童や保護者と積極的にコミュニケーションを図り、参加者同士の交流も生まれるように工夫した。

活動の成果

- 総合的なプログラムによって、参加者の考古学に対する関心が高まった
- ワークショップの企画・運営を通して、参加学生が文化財活用のノウハウを学んだ

今後の課題・目標・展開の可能性

- 過去の改善点を組み込んだ新しいプログラムの創出
- 学習者のニーズを把握するための実施調査
- ワークショップの企画・運営を経験した学芸員、埋蔵文化財担当技師等の輩出

文学部 教授 米田 文孝 Yoneda Fumitaka



仏教が日本に来た道をもとめて約25年、仏教のはじまりの地であるインド共和国で調査を行ってきた。その後、ユーラシア大陸を東にすすみ、仏教が日本で最初におこった奈良県の飛鳥の地にたどり着く。倭国・日本国の都であった飛鳥の姿を一度目にしたいと夢見ている。

